

家兔の体内に於いて受くるチモールの変化に就いて  
第三高等学校医学部生理教室に於いて  
(生理学教室助手 勝山虎三郎 岡山県病院助手医秦佐  
八郎)

薬学雑誌 196 号 545 頁(1898)より

明治 31 年 6 月号を目的もなくめくって、標題だけでは目に留まらなかったであろう。著者と所属につかまつた。第三高等学校というのは戦前の京都旧制三高ではない。1886 年、中学校令により全国に 5 つ設置された 5 年制高等中学(のち高等学校と改称)のうち、西日本を学区とする三高は京都に本部を置いた。大学予科のほかに学部設置が認められており、明治 21 年、学区内最大の岡山県医学校が三高医学部となり、薬学科も併設される。しかし明治 32 年京都帝大医学部が開校し、明治 34 年岡山の医学部は独立、薬学は廃止された。そのころの論文である。

秦佐八郎。明治 6 年島根県に生まれる。秦家の養子とな

り、同 28 年三高医学部卒。恩人養父が病死した養家ではひたすら秦の帰郷を待ち焦がれていたが、岡山に留まる。学問への夢捨てきれぬ事を口にして、地元縁者に恩知らず裏切り者と激しい非難を受けた。しかし、理解ある養祖父母が親戚を説得してくれ、同 31 年 7 月妻を置いて上京、北里柴三郎の伝染病研入所。これが後にドイツ、エーリツヒのもとでノーベル賞級の梅毒特効薬サルバルサンを開発することにつながる。

本論文は、その上京 1 か月前に出た。ウサギに駆虫薬チモール 3g を投与し得られた 1.2 g の尿中代謝物をグルクロン酸抱合体と推定している。分光学的分析機器のない時代、化学反応、精製、元素分析を繰り返す研究内容は、秦がただの青年医でないことを十分示している。しかし、この頃彼は何を考えていただろう。論文が出た喜び、養家への後ろめたさ、将来への不安と期待。明治の薬誌読者はもちろん本人すらも、彼の未来は誰も予想しなかった。

小林 力